

PEPNet-Japan

第6回 日本聴覚障害学生 高等教育支援 シンポジウム 報告書

2010. 11. 14. SUN
仙台市情報・産業プラザ ネットU



主催：日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク

国立大学法人 筑波技術大学

共催：国立大学法人 宮城教育大学

協力：みやぎ DSC

後援：文部科学省／独立行政法人 日本学生支援機構 (JASSO)

河北新報社／朝日新聞仙台総局／読売新聞東北総局／

毎日新聞仙台支局／NHK 仙台放送局／仙台放送／ミヤギテレビ



はじめに	2
開催要項	3
プログラム	4
報 告	
【分科会 1】基礎講座「どうする？どうなる？－受験～入学～授業－」	8
【分科会 2】「 ^{しょうかい} 詳 解！宮城教育大学－理念から日々の取り組みまで－」	1 3
【分科会 3】「一緒にスキルアップ！ －ノートテイク・パソコンノートテイク・手話通訳－」	1 8
【分科会 4】「みんなで解決！現場の悩み －先輩・コーディネーターとともに考える－」	2 3
【特別企画】「徹底解剖！PEPNet-Japan－あなたのギモンに答えます－」	3 1
【特別対談】「宮城教育大学学長と語る－大学教育と障害学生支援－」	3 7
【ランチセッション】聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト 2010	4 1
【ランチセッション】「聴覚障害学生支援に関する機器展示」及び 「東北地区における聴覚障害学生支援の活動紹介」	5 0



はじめに



日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）では、特に聴覚障害学生への支援体制が充実し、積極的な取り組みを行ってきている大学・機関と共同で、聴覚障害学生支援に関するノウハウを積み重ね、先駆的な事例の開拓を行ってきました。我々の活動の成果をより多くの大学・機関に向けて発信するとともに、全国の高等教育機関における支援実践についての情報交換をすることを目的とし、年に1回シンポジウムを開催しております。

今回第6回目となった日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウムは、初めての東北地区開催にもかかわらず、これまでで最も多い約310名（関係者含む）の方々にご参加いただきました。今回は特に開催地域の特色がわかるような企画を考え、工夫を凝らした点が特徴です。

まず午前中は、宮城教育大学に焦点を当てた分科会を設け、教育理念から制度の成り立ち、日々行われている支援の概要まで余すところなく「詳解」されました。その他にも、大学等での聴覚障害学生支援をわかりやすく解説した基礎講座や、実際に模擬通訳をしながらのスキルアップ講座、日々の悩みを参加者同士が語り合う分科会など盛りだくさんの内容で、どの分科会でも活発な議論、意見交換が行われていました。

午後は、PEPNet-Japanの組織や活動を改めて解説しながら参加者から寄せられたギモンに答える特別企画の他、目玉として宮城教育大学の髙橋孝助学長と藤島省太教授をお招きした特別対談が行われ、学長ご自身のポリシーや教員養成大学で障害学生支援に取り組む意義などを存分に熱く語っていただきました。

ランチセッションでは、毎年恒例となった聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテストをはじめ、聴覚障害学生支援に関する機器展示、東北地区における聴覚障害学生支援の活動紹介のパネル展示を設け、あちこちで活発な意見交換がなされている様子が見受けられました。

本報告書は、簡単にではありますが、それぞれの企画の内容を纏めたものになっておりますので、ぜひ多くの方々にお読みいただければと思っております。

最後に、本シンポジウム開催に当たり、企画から当日運営まであらゆる面で多大なるご尽力を賜りました宮城教育大学の皆様、これまで培ったネットワークを活かして多面からご協力いただきましたみやぎDSCの皆様には、深謝申し上げます。

そして、各企画にご協力いただきました講師の皆様、PEPNet-Japan 連携大学・機関の皆様、第6回日本聴覚障害学生高等教育支援シンポジウム実行委員の皆様はこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）事務局



開催要項

~~~~~

目 的 : 高等教育機関で学ぶ聴覚障害学生への支援については、近年多くの大学が聴覚障害学生の受講する授業に対してノートテイクを配置するなどの体制作りを進めている。日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）では、筑波技術大学を中心に、特に聴覚障害学生への支援体制が充実し、積極的な取り組みを行ってきている大学・機関と共同で、聴覚障害学生支援に関するノウハウを積み重ね、先駆的な事例の開拓を行ってきた。

本シンポジウムでは、全国の大学における支援実践に関する情報を交換するとともに、PEPNet-Japan の活動成果をより多くの大学・機関に対して発信することで、今後の支援体制発展に寄与することを目的とする。

期 日 : 2010年11月14日（日）10:00～17:00

会 場 : 仙台市情報・産業プラザネットU（仙台市青葉区中央1丁目3番1号AER内）

主 催 : 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan）  
国立大学法人 筑波技術大学

共 催 : 国立大学法人 宮城教育大学

協 力 : みやぎ DSC

後 援 : 文部科学省  
独立行政法人 日本学生支援機構（JASSO）  
河北新報社/朝日新聞仙台総局/読売新聞東北総局/毎日新聞仙台支局  
NHK 仙台放送局/仙台放送/ミヤギテレビ

大 会 長 : 高橋孝助（宮城教育大学 学長）

実行委員長 : 及川力（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター長）

事務局 長 : 白澤麻弓（筑波技術大学 准教授）

実 行 委 員 : 藤島省太・菅井裕行・松崎丈・芳賀茂・村田哲彦・

前原明日香・及川麻衣子・武山美恵子・横沢哲美（宮城教育大学）

高橋明美・田宮悠（みやぎ DSC）

石原保志・小林正幸・中嶋靖雄・三好茂樹・河野純大・長南浩人・

蓮池通子・萩原彩子・中島亜紀子・磯田恭子・石野麻衣子（筑波技術大学）

## プログラム

《第1部》10:00～12:00 分科会

■分科会1 基礎講座「どうする？どうなる？－受験～入学～授業－」

司 会： 岩田吉生氏（愛知教育大学 教育学部）

話題提供： 北林かや氏（東京大学 バリアフリー支援室）

アドバイザー： 鈴木牧子氏（筑波大学附属聴覚特別支援学校）

橋本一郎氏（東京都立中央ろう学校）

石原保志氏（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）

■分科会2 「<sup>しょうがい</sup>詳解！宮城教育大学－理念から日々の取り組みまで－」

司 会： 萩原彩子氏（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）

講 師： 松崎丈氏（宮城教育大学 特別支援教育講座）

前原明日香氏（宮城教育大学 しょうがい学生支援室）

アシスタント： 立田真由子氏（宮城教育大学 卒業生）

東條桂子氏（宮城教育大学 卒業生）

佐藤晴菜氏（宮城教育大学 特別支援教育教員養成課程）

■分科会3 「一緒にスキルアップ！

－ノートテイク・パソコンノートテイク・手話通訳－」

司 会： 田中啓行氏（早稲田大学 障がい学生支援室）

アドバイザー： 瀬戸今日子氏（名古屋大学 障害学生支援室）

原田美藤氏（愛媛大学 非常勤講師）

岡田孝和氏（関東聴覚障害学生サポートセンター）

能美由希子氏（筑波大学大学院）

吉川あゆみ氏（関東聴覚障害学生サポートセンター）

棚田茂氏（埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園）

■分科会4 「みんなで解決！現場の悩み－先輩・コーディネーターとともに考える－」

司 会： 高橋明美氏（みやぎ DSC）

アドバイザー： 河野恵美氏（立命館大学 障害学生支援室）

管野奈津美氏（筑波大学 卒業生）

福田夕香氏（白百合女子学園大学 卒業生）

宇治川雄大氏（宮城教育大学大学院 卒業生）

白江香澄氏（札幌学院大学 卒業生）



《ランチセッション》 12:00～14:00

聴覚障害学生支援に関する実践事例コンテスト

聴覚障害学生支援に関する機器展示

東北地区における聴覚障害学生支援の活動紹介

PEPNet-Japan 連携大学・機関活動紹介

《第2部》 14:00～17:00 全体会

14:00～14:15 開会式

14:15～15:15 「徹底解剖!PEPNet-Japanーあなたのギモンに答えますー」

司 会： 菅井裕行氏（宮城教育大学 特別支援教育講座）

及川麻衣子氏（宮城教育大学 しょうがい学生支援室）

回 答 者： 高橋信雄氏（愛媛大学 教育学部）

金澤貴之氏（群馬大学 教育学部）

吉川あゆみ氏（関東聴覚障害学生サポートセンター）

白澤麻弓氏（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）

15:15～15:30 休憩

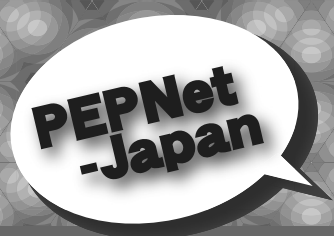
15:30～16:50 特別対談「宮城教育大学学長と語るー大学教育と障害学生支援ー」

ゲ ス ト： 高橋孝助氏（宮城教育大学 学長）

藤島省太氏（宮城教育大学 特別支援教育講座）

司 会： 中野聡子氏（東京大学 先端科学技術研究センター）

16:50～17:00 閉会式





# 報告



## 【分科会 1】

### 基礎講座「どうする？どうなる？-受験～入学～授業-」

報告者：筑波技術大学 蓮池通子

#### 企画趣旨

これから入学する聴覚障害学生を受け入れる大学の教職員、反対に聴覚障害学生を送り出そう学校等の教員を対象にした分科会として実施した。願書の提出や入試など、大学に入学するまでの手続きで起こる問題とこれに対する支援、そして入学した後の情報保障等の状況について、聴覚障害学生支援の全体像を解説した。また支援の現状を踏まえた上で、課題となる問題について参加者の間で共通理解をはかる事とした。この中では、生徒や学生の社会自立に向けたステップとして、教師や支援者は何をどこまで支援したら良いのか、生徒や学生が自分自身で判断し解決しなければならないことは何なのかということを含めたいと考えた。



前半は、聴覚障害学生支援の基礎知識として、現在、大学で障害学生支援コーディネーターをされている方から、受験や授業など場面ごとの支援の具体とその流れについて、講話形式でお話しいただいた。

後半は、Q&A というかたちで、フロアからの質問に対して、アドバイザー（講師）の方からご助言をいただくとともに、情報交換、意見交換を行った。上記の障害学生支援コーディネーターの他、ろう学校で進路指導をするという立場から生徒の大学進学を支援してきた先生方から、事例にもとづいた具体的なお話をいただいた後、参加者の皆様からの質問や意見に対して、回答や助言をいただいた。

後半は、Q&A というかたちで、フロアからの質問に対して、アドバイザー（講師）の方からご助言をいただくとともに、情報交換、意見交換を行った。上記の障害学生支援コーディネーターの他、ろう学校で進路指導をするという立場から生徒の大学進学を支援してきた先生方から、事例にもとづいた具体的なお話をいただいた後、参加者の皆様からの質問や意見に対して、回答や助言をいただいた。

#### 内容

本分科会の司会は、愛知教育大学の岩田吉生先生にご担当いただいた。話題提供、活動報告、そして Q&A コーナーという流れで進行した。

#### <話題提供>

最初に、話題提供として、東京大学バリアフリー支援室の北林かや氏から「東京大学における聴覚に障害のある学生へのサポート」というテーマでお話をいただいた。ここでは大学の中にいる障害学生支援コーディネーターの立場から、受験から授業開始までの支援手続きのタイミングなどについて、特に入試での特別措置とその申請、合格者に対してのサポート体制、大学内の部署・組織間でのサポート体制の連携等について解説していただいた。東京大学では、学部・バリアフリー支援室・大学本部が連携して支援を実施している。この 3 者間で分担・連携し聴覚障害学生のニーズの確認と情報保障手段の提供を入学

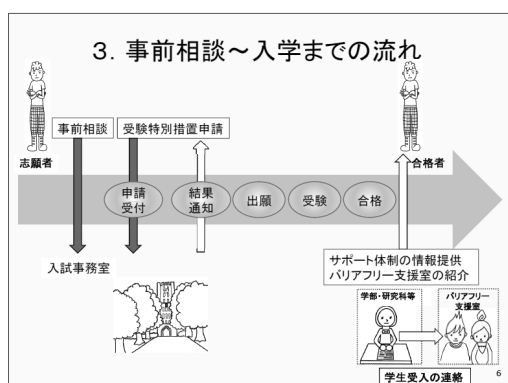


図1 東京大学における聴覚障害学生の事前相談～入学までの流れ  
(北林氏作成スライドより引用)

前から卒業まで実施しているとのことであった。

また、各大学が一人の聴覚障害学生を受け入れ支援体制を整えるためには、それぞれの大学の事情や、これまでの経験などによって支援開始までにかかる時間や準備できる支援の内容が異なるということが指摘された。そのため、聴覚障害学生のニーズを伝え、より良い支援体制の整備をするためにも、早めの相談を勧めたいということであった。

この他に、バリアフリー支援室の活動についてもご紹介いただいた。情報保障者であるサポートスタッフの養成・研修はもちろんのこと、教職員に対しての聴覚障害理解のための啓発・PR活動の実施、聴覚障害学生やサポートスタッフとの定期的な意見交換なども積極的に実施されているとのことであった。

## ＜活動紹介＞

活動紹介として、筑波大学附属聴覚特別支援学校の鈴木牧子先生と東京都立中央ろう学校の橋本一郎先生のお二人から、日頃の学校内での取り組みなどをお話いただいた。

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下、附属聾学校）の鈴木先生からは、まず同校の最近の進学状況についてご説明いただいた。近年大学側の聴覚障害学生に対する支援が充実してくる中、ろう学校からの大学受験者数の増加、進路選択の幅の広がりが実感され、大学側の支援体制の整備についても受け入れ経験のある大学では比較的問題なく体制が作られるとのことであった。ろう学校の生徒にとっては、すぐに情報保障の体制が整備されることは喜ばしいことであるが、一方で他の学生と同等の学力を持たせてろう学校を卒業させなければならないという使命に駆られているとのことであった。そのため附属聾学校では、学習意欲を喚起するために定期試験の平均点（普通教科）の上位者を校内で発表する、自分の実力を客観的に把握させるために漢字検定、英語検定、模擬試験などを積極的に受験させる、総合的な学習などで文献を読み、レポートをまとめさせるなどの取り組みをされている。また、コミュニケーションや社会性、日本語の表現力や理解力を向上させるために、教員がこれらを生徒に意識させながら様々な活動に積極的に参加させているということであった。その例として、一般の高校生との交流で「ろう学校の生徒が聴覚障害について説明する」という活動、文化祭での「情報保障に関する映画制作」の紹介があった。

### 高等部卒業までに 身につけてほしい力・姿勢・態度

#### (2)コミュニケーション・社会性に関すること

- ④ 場面や相手の立場に応じて、いくつかのコミュニケーション手段を工夫して使える。
- ⑤ 相手の立場や考え方を尊重しながら、自分の状況や気持ちを素直に（率直に）述べることができる。
- ⑥ 周囲の人間と協調・協力しながら、様々な物事を進めたり、問題解決したりする。

※行事・部活動・交流会などで、意識させて参加させる。

図2 生徒に身につけてほしい力・姿勢・態度  
(鈴木先生作成スライドより引用)



図3 先輩から、大学で学べること  
について学ぶ！  
(橋本先生作成配付資料より引用)

東京都立中央ろう学校の橋本先生からは、調和の取れた人間関係を養うための取り組みをご紹介いただいた。学習意欲を育て、自学自習の姿勢を身につけさせるために、朝「学びの時間」を設定して週4日間、国語・数学・英語などの勉強をさせており、また卒業後大学へ進学することを想定して、自立活動の授業で大学生との交流の場を設けているということであった。この交流は、実際に大学に在籍している聴覚障害学生をろう学校へ招き、その学生達が生徒達に自身が大学で勉強している内容をプレゼンテーションしてもらうというものである。さらに、大学での授業がどのようなものなのか生徒に実感してもらうため、都内にある大学の協力を得て情報保障を付けた通常の大学の講義を90分間受ける体験も行い、大学で学ぶための心の準備をさせる取り組みもご紹介いただいた。また、情報保障を受けるだけではなく、それを支える人たちについても考えら

れるよう、ノートテイカーや手話通訳者といった情報保障者と「なぜテイカーや通訳者になったのか」というような、素朴な疑問を話し合う懇談の時間も準備しているということであった。最後にこれまで中央ろう学校の生徒が大学受験に際して実際に経験した、今なお残る「バリア」の例をご紹介いただいた。ある大学の社会福祉系の学科長が、「障害者は助けてもらう立場の人であり、そんな人が高齢者の命を守ることができるのか。あなたは聞こえないんですよ。」といった発言をされたり、別の大学では、入学後に「実は、一番発音のわかりにくい先生をあなたの面接官にした。」といった事実を聞かされた学生もいたとのことであった。

### <Q&Aコーナー>

フロアの参加者からの質問を受け付け、アドバイザの皆様にお答えいただく予定であったが、時間の都合で、事前にいただいた質問に回答するにとどまった。その質問と回答を以下に紹介する。

Q：聴覚障害学生に対する情報保障者派遣など学内で支援を実施している大学を探すには、どのようにしたらよいか？







A：以下の方法が考えられる。

- 1) 大学への進学実績のあるろう学校に問い合わせる。
- 2) 大学のホームページや大学の障害学生支援室等のホームページを検索する。
- 3) 関東聴覚障害学生サポートセンターへ相談する。
- 4) PEPNet-Japan の窓口へ相談する。

ただし、ろう学校教員やろう教育専門の大学教員の立場からすると、情報保障があるからその大学を選ぶというのではなく、生徒自身が何を学びたいか、どの大学なら入れるのかを重視し、その後に直接入試課なりと相談をする事が大切なステップであると考えられる。支援は無いが、身近な人たちと相談し周囲を巻き込みながら道を探ることが必要であると思われる。この経験は、大学での就職活動でも生き、また就職後にも、自分で仕事を開拓していく力にもつながってくる。

Q：面接試験で筆記試験の他に口述試問をする場合に筆談以外の対応方法はあるのか。(大学職員より)

A：主な方法に以下のような方法が考えられる。

- 1) 手話通訳をつける。
- 2) 聴覚活用が出来るのであれば復唱や口話で確認しながらやりとりする。
- 3) FM 補聴システムを使用する。

その他、PEPNet-Japan が作成した Tip Sheet に聴覚障害学生とのコミュニケーションについてまとめられたものがあるので、それを参考に学生に合った方法を相談されることが良いと思われる。

大学職員の方から相談をいただける場合にはよいが、ろう学校側または、聴覚障害のある生徒から大学に相談に行く場合がほとんどであると思われる。聴覚障害のある生徒にとっては、入試の面接だけでなく、事前面談をしなければならないという負担も予想される。事前面談で生徒は、自分の障害についてきちんと把握し、説明できる力が求められる。どのような支援があれば試験で自分の力のすべてを発揮することが出来るのか、それを自ら語る必要がある。このような自己理解とあわせて、周囲の人に聞こえないことをどう理解してもらうか、どう話せばよいかを身につける必要がある。これらは、大学受験のときだけでなく、大学に入学後も、そして就職活動をするときにも同様に重要なスキルとなる。

Q：実習や実験の多い工学系の大学で、聴覚障害のある学生に対して実習等をさせる場合、危険が伴う場合の対応方法を知りたい。

A：例えば、筑波技術大学では、実験などの前に事前にその実験の流れや注意点について十分に説明を行う。また、「やってはいけないこと」の例を実際にやってみせたり、資料などを準備してその「危険である事」を理解させてから実習に参加させている。その他にも、呼びかけや声がけが聞こえないことで命に関わるような危険がある場合には、聴覚障害学

生の活動にある程度の制約を設けるが、先ほどの例と同様に、事前に十分に説明をしたあと、実習には参加をさせたという例もある。

ろう学校などでも、実験や実習などは行われている。その場合にも、先ほどの例のように、まず実験の流れを説明し、具体的にどのようなことが危険であることを説明するという方法で行っている。このようなノウハウは、問い合わせがあれば、ろう学校から提供することも可能である。

### 到達点と課題

今回の分科会では、大学の教職員に加えてろう学校の先生方も対象としたテーマを設定した。実際にはろう学校の先生方の参加は少なかったが、大学の教職員の方々に、ろう学校で先生方が大学進学を見据えて、どのような活動をされているのかを理解していただく良い機会となったと考える。また、聴覚障害のある生徒を受け入れた大学の教職員の方々が、その生徒の母校であるろう学校との連絡を取ったり、問題解決やより良い支援のために連携を始めることが期待される。今回はフロアからの質問時間がとれなかったため、参加者の「今知りたいこと」を直接うかがうことはできなかった。しかしながら、聴覚障害者とのコミュニケーション方法や、情報保障手段、大学入学に際して必要な手順など、基本的な情報は、PEPNet-Japan のホームページや教材資料などを使って継続的に啓発を行っていく必要がある。





## 【分科会2】

「<sup>しょうがい</sup>詳解！宮城教育大学—理念から日々の取り組みまで—」

報告者：筑波技術大学 萩原彩子

宮城教育大学といえば、聴覚障害学生支援の先進校として知られている大学の1つである。しかし、かつては学生同士の個人的なサポート活動しか行われていなかった時代が長く続いていた。その後、宮城教育大学の教育理念・目的に基づき、障害学生支援を通して学生の「特別支援教育マインド」を育成するという観点が持ち上がり、平成16年度の「障害学生修学支援プロジェクト」の設置を皮切りに全学的な支援体制への移行が行われた。平成19年度には「障害学生も共に学べる総合的学生支援」として、文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」に採択され、平成21年度に「しょうがい学生支援室」が設置されるなど、著しい進歩を遂げている。その一方で、学生同士の個人的なサポート活動の積み重ねのなかで培われ、受け継がれていた「学生が主体となり、お互いのニーズや困難を確認して協同的に活動する」という精神的土壌も大切にし、学生の主体的な活動をコーディネーター・教員が後方支援して情報保障支援活動を展開している。どのようなきっかけで、また、どのような戦略で、ここまで支援体制を作り上げたのだろうか。本分科会は、宮城教育大学の事例をもとに各大学の支援体制をより良くするために参加者とともに議論を深められたらと思い実施したものである。

以下、当日の内容を再度整理するとともに、その成果について述べたい。

なお、「しょうがい学生支援室」の組織名等については、宮城教育大学の標記をそのまま使用している。

## 話題提供

本分科会では、講師として宮城教育大学から特別支援教育講座の松崎丈氏としょうがい学生支援室の前原明日香氏をお迎えした他、アシスタントとして同大卒業生の東條桂子氏と立田真由子氏、現役学生の佐藤晴菜氏にご協力いただき進行した。

まず、前原氏から宮城教育大学の障害学生支援の全体像として、支援の目的やしょうがい学生支援室の体制、行

### しょうがい学生支援の目的

#### 1. 宮城教育大学における理念・目的

- ・優れた資質・能力を持った教員の養成
- ・高度の専門性と実践的な教育能力・指導力を持った人材の育成
- ・広く豊かな教養を身につけ、自然や社会への探究心を育てる人間への深い愛情を核とした職業に対する真摯な態度の育成

#### 2. しょうがい学生支援室の目的（宮城教育大学障害学生支援室規程 第2条）

「本学に在籍、あるいは入学が認められた障害のある学生が、他の学生と等しく教育を受ける権利が保障されるよう、障害学生支援に関する方針の立案及び支援システムを構築するとともに、具体的方策を検討並びに実施する。」



全ての学生に「特別支援教育マインド」を育成

2

図1 しょうがい学生支援の目的  
（松崎氏・前原氏作成スライドより引用）

われている支援の内容が話された。宮城教育大学では、教員養成系大学という特色を活かし、すべての学生に「特別支援教育マインド」を育成するというポリシーのもと、支援が進められている。また、聴覚障害、視覚障害、肢体不自由などの全障害領域を網羅する特別支援教育教員養成課程が設置されており、それらの専門教員を含めてしょうがい学生支援室（以下、支援室）の体制が構築されている。この2点が大きな特徴と言えるであろう。

続いて、松崎氏から支援室が設立されたきっかけと経緯について、当時の学生のコメントをはさみながら紹介がなされた。当初大学としての支援体制はなく学生による任意団体で自主的に支援活動が行われてきたが、平成16年に聴覚障害学生が推薦入試で合格したことを大きな契機として、支援室の前身となる「障害学生修学支援プロジェクト」が設置された。全学的な組織の設立は喜ばしいことであるにもかかわらず、それまで学生団体で活動してきた学生たちのコメントは「これまで大学や教員は何もしてくれなかったのに、どうして今さら…という思いが拭えなかった」「大学が担ったとして、本当に聴覚障害学生支援の運営や活動ができるのか、非常に心配で先が見えなかった」（図2参照）など、必ずしもそれを歓迎しているものではなかったという。当時学生団体のスタッフをしていた立田氏は、本分科会の中で「プロジェクトが発足してからコーディネーターが設置されるまでの期間は、大学と学生団体との役割分担が見えず、最も活動しにくい時期だった」と述べている。大学がどのような組織を作るのか、その後学生はどのような関わりを持てばよいのか、学生に様子が伝わらず不安が広がっていたものと思われる。

しかし一方で立田氏は、「コーディネーターが配置されたことで、それまで学生同士では遠慮して言いづらかったことや解決できなかったことをいつでも気軽に相談できるようになり、安心感を得られた」ともコメントしており、学生団体だけで支援を行う限界とコーディネーターの有効性が垣間見られた。

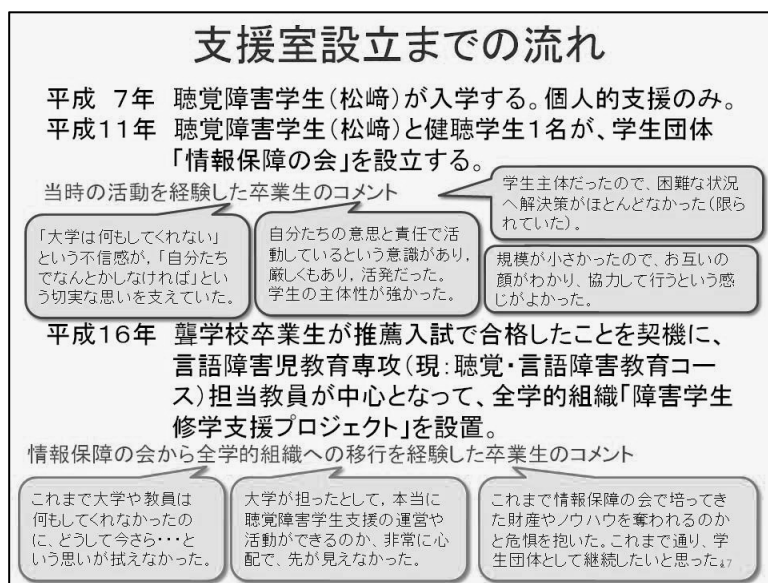


図2 支援室設立までの流れ  
(松崎氏・前原氏作成スライドより引用)



## 学生主体の活動について

### 1. 「情報保障の会」の活動体制の維持

1) しょうがい学生支援の基盤は、「学生主体」であり、「学生同士の係わり合い」にあるという基本理念

2) 学生の手による「運営スタッフ」体制の継続

学生: ①情報保障の実施(NT、PC、音声認識通訳)

②養成研修、広報活動、交流企画の実施

※コーディネーターは適宜助言・意見

コーディネーター: 上記以外の業務

### 2. 聴覚しょうがい学生に対する教育的支援

19

図3 学生主体の活動について  
(松崎氏・前原氏作成スライドより引用)

学生団体の自主的な活動から全学的な組織体制を形作ったいわゆる「移行期」の結果、学生の主体性を尊重しつつ支援を行っていくという方向性に至り、現在もその姿勢が守られている。その具体的な取組みが「学生主体の活動について」(図3参照)として紹介された。具体的には聴覚障害学生のニーズ把握やノートテイカーのコーディネートなどについては「しょうがい学生支援コーディネーター」が担い、その他の練習会や反省会などの企画運営を「学生運営スタッフ」が担うことで、学生同士の係わり合いを促進し、活発な活動を促したとのことである。これにより、聴覚障害学生と支援学生が「支援を受けるだけ」「するだけ」の関係に留まらず、「よい支援とはどのようなものか」「どう行っていくべきか」をお互いに議論できる関係を構築していったとのことであり、これが学生団体の自主性を活かすポイントであったと言えよう。

ここで、聴覚障害学生と支援学生、それぞれの立場から「主体性とは」についてコメントがあった。まず当事者であり卒業生の東條氏は、自身の活動や体験を振り返りながら、卒業後の社会生活を見据えて聴覚障害学生は以下のような主体性を身につけることが重要であるとまとめた。

- ・自分の聞こえの状態をきちんと把握すること
- ・聞こえの状態を自分の言葉で表現すること
- ・環境に合わせて自分に合った情報保障を考えること

これらは、活動の中で自分の障害やニーズについて語る経験を積むことで培われたとのことであった。

続いて現役支援学生の佐藤氏から、学生スタッフの具体的な活動内容の説明がなされた。その中で佐藤氏は「聞こえない学生を理解したい、という思いを持って自分たちで考え動くことで、やりがいや楽しさを感じている」と述べている。

次に、前原氏から学生や卒業生を対象に行われたアンケートの説明がなされた(図4参照)。支援室やコーディネーターの設置については、「移行期」とのまどいとは変わって歓迎している意見が多く、学生との関係が非常に良好に保たれていることがわかる。一方で、「システムが整った分、しょうがい学生の態度が悪くなった気がする。『保障されて当たり前』という空気がある」

「支援体制が確立した今だからこそ、情報が入らない辛さ、聴覚障害学生と支援学生関係なく自分自身が活動の主体であることを、学生自らが考えていかなければならないと思う」など、支援体制が整ったことによるマイナス面の意見も挙げられていた。これらについて前原氏は「学生たちが活動の主体は自分たちであると認識し、そういったマイナス面についても意見を互いに交わしあえるような関係づくりを大切にしたい」とまとめた。

最後に松崎氏は宮城教育大学における聴覚障害学生支援の特徴を図5のようにまとめた。障害学生支援を障害学生のみならず支援学生を含めたすべての学生に対する教育の場として捉えている点は、先進的に支援を行っている大学と共通する大きな特徴と言えるだろう。今後の課題として、人材(支援学生)の確保や学生主体の活動の維持、今後の予算体制などが挙げられたが、それらをどう乗り越えるか、さらなる取組みを期待したい。

## 支援学生における支援観の変化 —教育理念「特別支援教育マインド」の育成との関連—

学生や卒業生のコメント

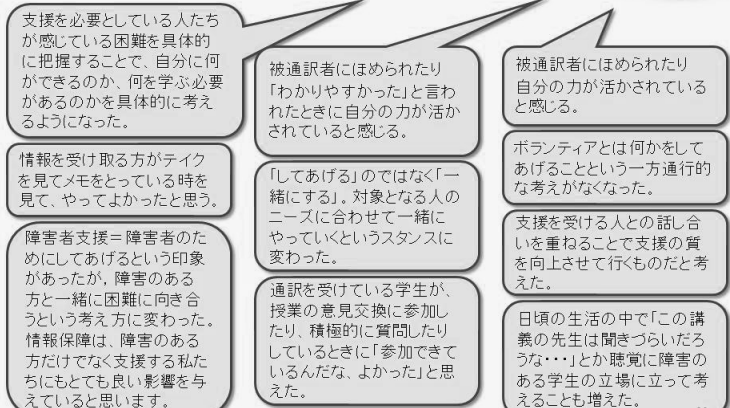


図4 支援学生における支援観の変化  
(松崎氏・前原氏作成スライドより引用)

## まとめ

### 本学における聴覚しょうがい学生支援の特徴

1. 本学は、しょうがい学生支援について、本学の教育理念につながる重要な取組であると認識し、宮城教育大学の大きな特徴として位置付けている。
2. 聴覚しょうがい部会教員、コーディネーターは、単なる「支援担当者」としてではなく、「学生主体」「学生同士の係わり」を重視する教育的立場で支援することが、しょうがい学生支援の活動の活性化につながると考えている。
3. 聴覚しょうがい部会の学生は、聴覚しょうがい学生支援の活動の主体は自分たちであることを認識し、アットホームな雰囲気得意的に活動している。

図5 まとめ(松崎氏・前原氏作成スライドより引用)





## まとめ

今回は初めての東北地区開催ということで、PEPNet-Japan の運営委員からは「せっかく行くのだから、その地区での取組みをとことん詳しく取り上げて欲しい」という要望が出されていた。そこで今回の分科会が企画されたわけだが、組織体制からその経緯、具体的な活動内容まで、タイトル通り宮城教育大学を余すところ無く「詳解」いただいた分科会であったと思う。また、当日参加していた宮城教育大学の関係者・卒業生からも「自分たちの活動がこのような場で発表できるほどに実を結んだことが非常に感慨深い」「学生時代、悩みながらも『聞こえない学生とともに』という強い思いで活動していたことを思い出して胸が熱くなった」などの声が寄せられており、発表いただいた大学にとっても、これまでの活動を振り返るよい機会となったものと思われる。

もちろん、宮城教育大学は一例であって「理想像」ではない。大学の理念や規模、体制などによってそれぞれの特徴や形があるのは当然で、今回はその1つを紹介したにすぎない。しかし、その1つをそれぞれが大事に積み上げていくこと、そしてそれを多くの人々と共有していくことは、お互いの支援を見直すとともにさらなるステップアップにつながる重要な要素になると思っている。当日は、教員、職員、学生、または支援体制のある大学、これからの大学など、様々な立場の方が参加されていたが、おそらくどの立場の方にも何らかの「お土産」があったのではないだろうか。今回の「詳解」によって、参加者が自身の取組みの良さを見直し、さらに今後の課題を見つめるきっかけになっていただければありがたい。

